

教授へのインタビュー

EDLSC 秦 喜美恵 教授



秦 喜美恵教授

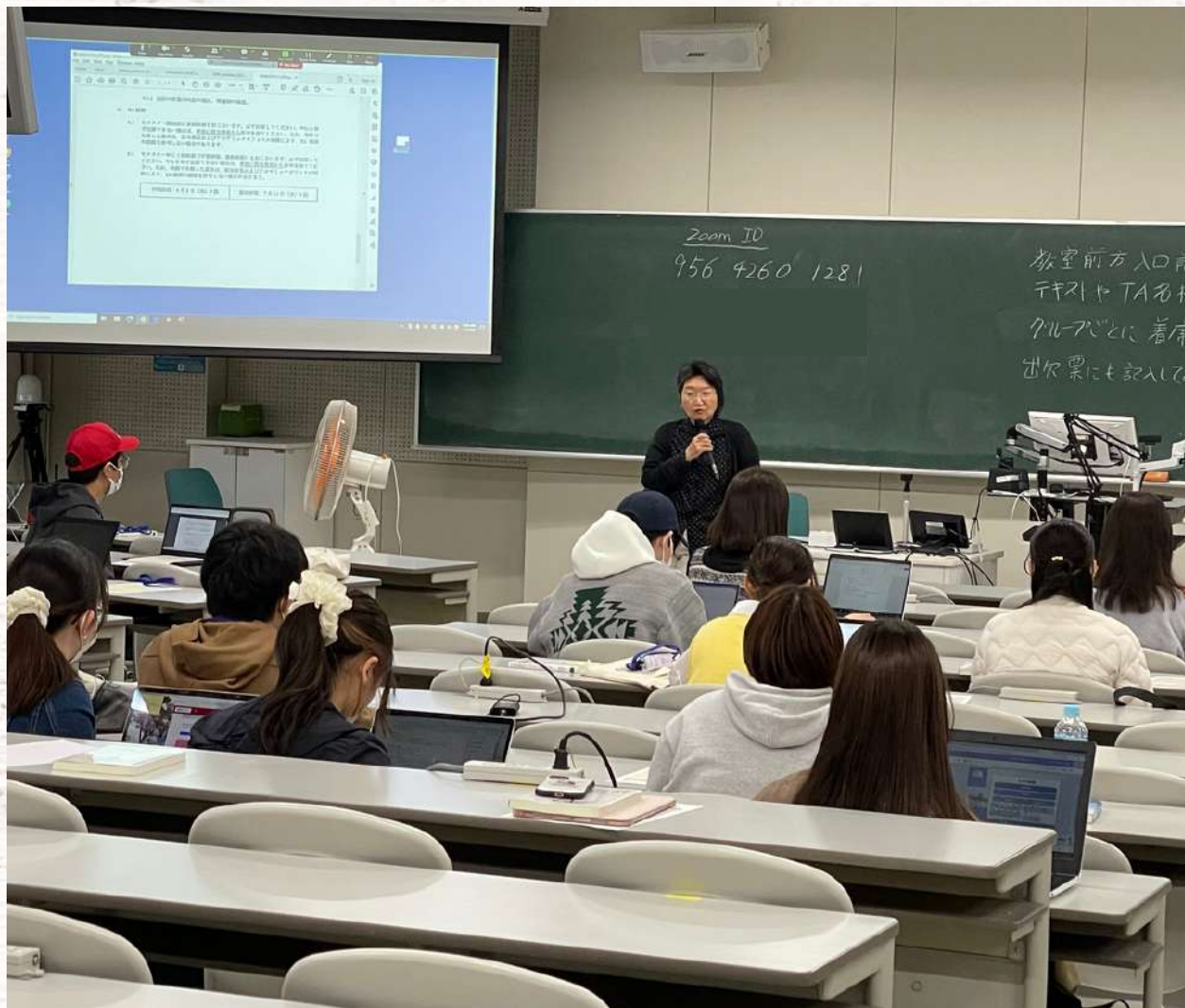
APUにおける初年次教育の変化とそのねらい



2023年度春semester、APUキャンパスは熱気に包まれています。その背景には、サステナビリティ観光学部（ST）の新設や、APUの教育開発・学修支援センター（EDLSC）の科目を含む、カリキュラムの改革があります。

今semesterのプロジェクトQでは、サステナビリティ観光学部と教育開発・学修支援センター（EDLSC）の著名な2人の教授にインタビューし、その教授法を分析することで、他の先生方の新境地を開拓する一助になればと考えております。

I. 初めに



1. 先生ご自身についてご紹介ください。

元々は社会言語学、文化人類学を専門とし、儀礼研究などを行っていましたが、現在はStudent Development（学生の成長理論）を専門としています。それを土台に、授業だけでなく課外活動のなかで、学生たちが経験するリーダーシップの育成の要素を授業や研修で教授し、学生たちのリーダーシップ活動をサポートしています。

II. APUの初年次科目について

1. 一秦先生は初年次科目をご担当されていますが、APUの初年度教育の特徴は何ですか？またAPUの初年次教育には、他の大学にはないどのような傾向があると思いますか？

初年次教育では大学で学ぶために、学びの姿勢や態度、スキルを身に付けるということが目標です。そのためには高校での受け身型の学びから、主体性と能動性が求められる大学での学びに移行することが必要であって、全国の大学で取り組まれています。APUでは、それにプラスして多文化環境に突入する準備をする必要があります。異文化理解への動機付けを初年次に行うというのがAPUの特徴であり、それを提供しているのが全学必須のMCWです。2011年から、MCW研修担当の教員が、APU教員が国際学生と国内学生のリーダー・ティーチング・アシスタント（LTA）の研修を行った後、LTAが各クラスの国際学生と国内学生のティーチング・アシスタント

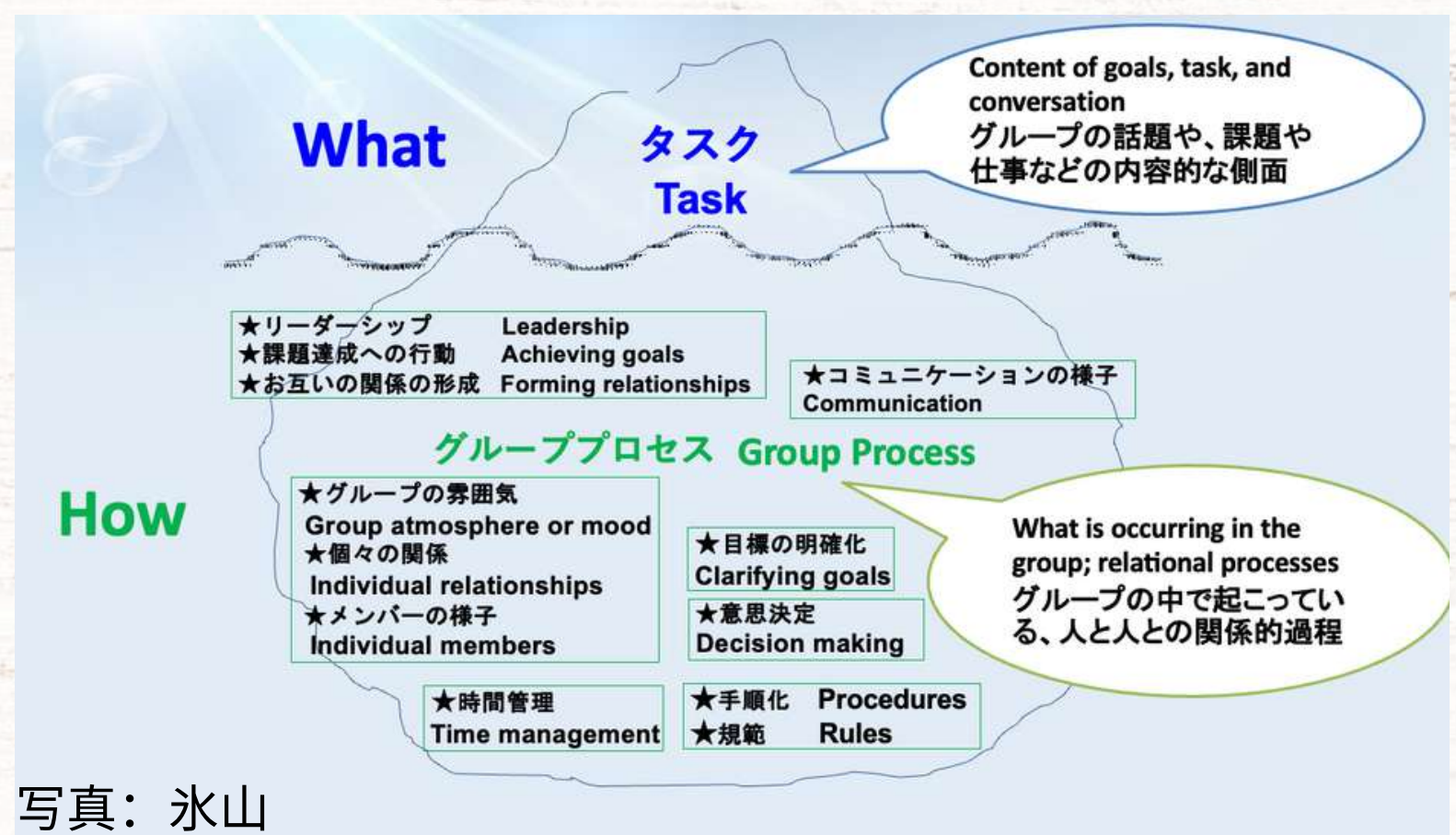
（TA）の研修を行い、そして、そのTAが演習クラスで日本語基準と英語基準で編成された混合グループに授業を行う仕組みを確立しています。初年次科目で先輩ピアリーダーが全クラスの演習を担当するこの仕組みは、世界中を探してもどこにもありません。APUの初年次教育は多文化キャンパスにおけるAPUでの学びの基礎となっています。また、APUの2030ビジョンに向けた人材育成の観点から、MCWでは、日英Mixグループで独創的で社会的意義のある「創造的なサマースクール」の構想案を作成し、FGLではワークショップセッションを実施し他者の学びの場を提供するなど、社会に影響力をもてる資質を育てています。

2. 23年度春semester以降、従来のスタディスキル・アカデミック・ライティング (SSAW) とピアリーダートレーニング入門 (PLT入門) が、スチューデントサクセスワークショップ (SSW) とグローバルリーダーシップの基礎 (FGL) に変更になりました。従来の科目との違い、新しくなった科目の強みを教えてください。

これまでのPLT入門では、協同学習を通して、時間管理やディスカッションスキルなど大学生に必要なスキルを学ぶことによって能動的、主体的な学生を育てていました。そして、コース全体を通して、4年間の自分の大学での取り組みを意識化できるよう、先輩やキャリアオフィスや卒業生からのレクチャーを取り入れ、早い段階からキャリアデザインの考え方を導入しました。新たに開講されたFGLでは、APUの2030ビジョンのチェンジメーカー育成につながる基礎を身につけられるよう、よりリーダーシップ育成に重きを置き、リーダーシップに関する理論を事前の読み課題に取り入れ、授業では読み課題を基に、自らの経験をリソースとしてリーダーシップの分析や話し合いができる学生を育てています。最難関を乗り越えるために、自らも変容していくアダプティブリーダーシップ理論を学び、技術的問題の解決のみならず、それに伴う適応課題へも目を向けたリーダーシップの必要性を理解できるように構成しています。コースの最後には、日英クラスのMixグループが、他者に学びの場を提供するセッションを実施します。最終レポートで、そのセッション実施までのMixグループでの関係性のあり方を振り返ってもらい、グループメンバーの関係性のプロセスを分析してもらいます。つまり、FGLはグループの関係性プロセスを意識できるようになることを重視しています。

SSWは大学での学び方を学ぶ授業です。この授業は、主体的に学び、問うことができるようになることを学生の成功 (Student Success) ととらえ、新入生が学生としての成功を実現するために支援することを目的としています。

今までのSSAWはアカデミックライティングに特化してレポートが書けるようになるためのコースでした。SSWでは、ライティングに関する知識やスキルを学びながら、全学生に「仲間と共に学ぶ協同学習ができる」、「自分の学びを自分で分析し学びを進めていけるメタ認知力を高めて自己調整学習者になる」よう、最初の6週と最後の3週で、「PLT入門」の授業内容の約半分を取り入れています。SSWでは、反転学習を用いて学習します。大学での学びの基礎をテキストに使用し予習ノートを作成したり、予習ビデオを視聴してきてもらうなど予習をした上で、授業のワークショップで体験的に学ぶ構成になっています。



III. 学生の自主学習

1. 学生の自主学習を促進していくために心がけていることはありますか？

なぜ、予習が大事なのかという予習の意義をきちんとわかるように伝えることです。また、予習してきた次の授業で理解が進んだ、楽しい取り組みだったと思ってもらえるよう予習が授業に生かされるような仕組みをデザインすることが必須です。授業の満足感や達成感はとても重要であるからこそ、教員としては予習したことが次の授業に生かされ、学びにつながるような準備をする責任があると思っています。

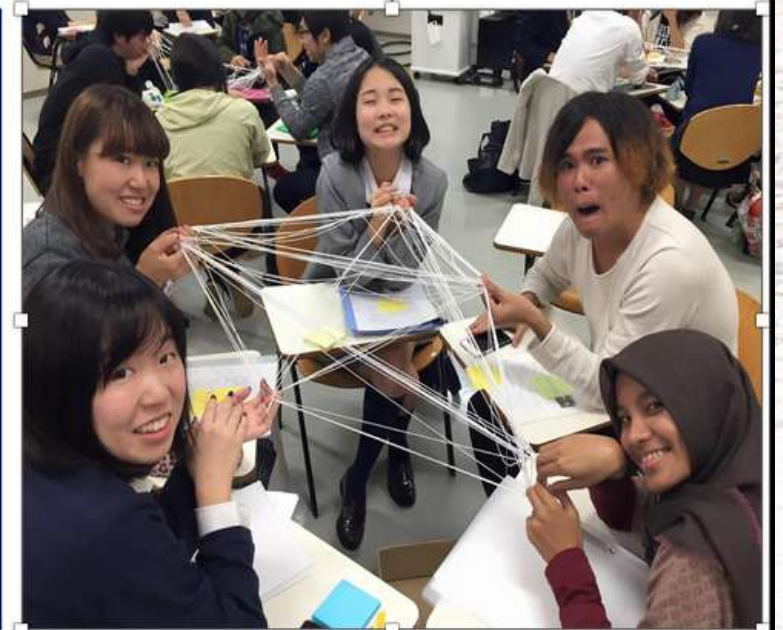
2. グループディスカッションなどの学生同士の学びを促進していくために、クラスやグループをどのように運営していますか？

I FGLでは白い糸を使用し、ディスカッションを「見える化」しました。このワークでは話し手が糸の玉を持ち、話し終わったら次に話す人に玉を手渡し、これを続けていきます。ワーク終了時にグループの糸の形を見ると、糸が太いところ、細いところがあることが分かります。これより誰が多く話している、同じ人と会話をしている、ほとんど話さない人がいるなどといったことを分析し、自分たちの活動を俯瞰してみるメタ認知力を養います。また、もし1人がグループワークを休み自分一人くらいいいなくても、と思っていれば、それは一人分の考えを失っていること、グループには、あなたにしか考えつかないアイデアがあるんだよということをちゃんと伝えるようにしています。これは、自分の学びが人の学びに、人の学びが自分の学びになるという協同学習の考え方の基本です。

ディスカッションの見える化/
Visualizing Discussions

白い糸
White
String

写真：白い糸



3. また、現在、国際生の出身国がより多様化してきているなかで、学生同士がスムーズに異文化コミュニケーションについて理解していくために工夫している点はある点ありますか？

逆説的ですが、APUでは、「スムーズに異文化コミュニケーションができない体験をすることの価値」があると考えています。もちろん、自分がチーム内でどういう行動をしなければならないか、というのは1つの知識として異文化コミュニケーションで学びますが、実際の多文化メンバーでのグループやチームではやはり、予期せぬ問題が起きます。自分ができても周りにできてない人がいるときにどうしたらいいのか、考え方が対立した時はどう乗り越えたらいいのか、ミーティングに参加しないメンバーをどのようにインクルージョンできるのか、力を付け励ますことができるのか、これらの問題があることが学びどころなんです。特に、初年次教育は、大学生活をスムーズに送っていくためのケア、サポートをする場でもあるので、うまくいかない、できていない学生が諦めずに取り組むために、ピアリーダーとしてTAたちが最大にサポートをしています。

4. 学びの促進のためにどのような学習ツール、モデルを使用していますか？

Kolbの「経験学習モデル」を元に授業を行っています。この経験学習モデルは、人生を通して活用できるので、SSWで全学生に導入しています。ツールは、KJ法やマインドマップを導入して、思考やアイデアの見える化に活用しています。オンラインに移行した時に話し合いを可視化して、アイデアを出しまとめていくための「Miro」というオンラインツールを使用しましたが、現在もアカデミックアドバイジングなどでは使用しています。対面授業に戻ってからは、教室に設置されている可動式ホワイトボードを使用や模造紙を使用しています。アイデアが出たらポストイットに書き出し、同じ内容を寄せ集め

て丸で囲み矢印で関連付けたりすることがディスカッションの質を高めます。また、SSWでは、必要な学生にはライティングセンターにつなげるようにしていました。

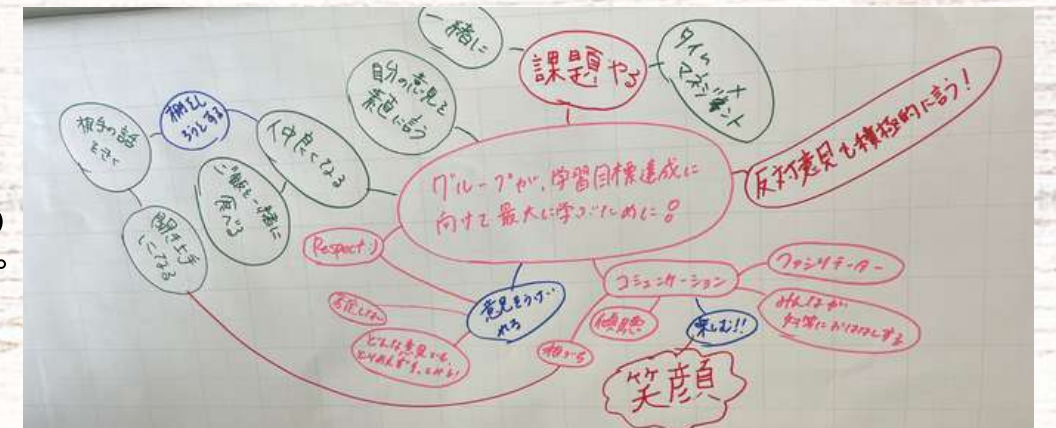


写真: 模造紙のマインドマップ



写真: miroのKJ法空間配置図



写真: 模造紙のKJ法空間配置図

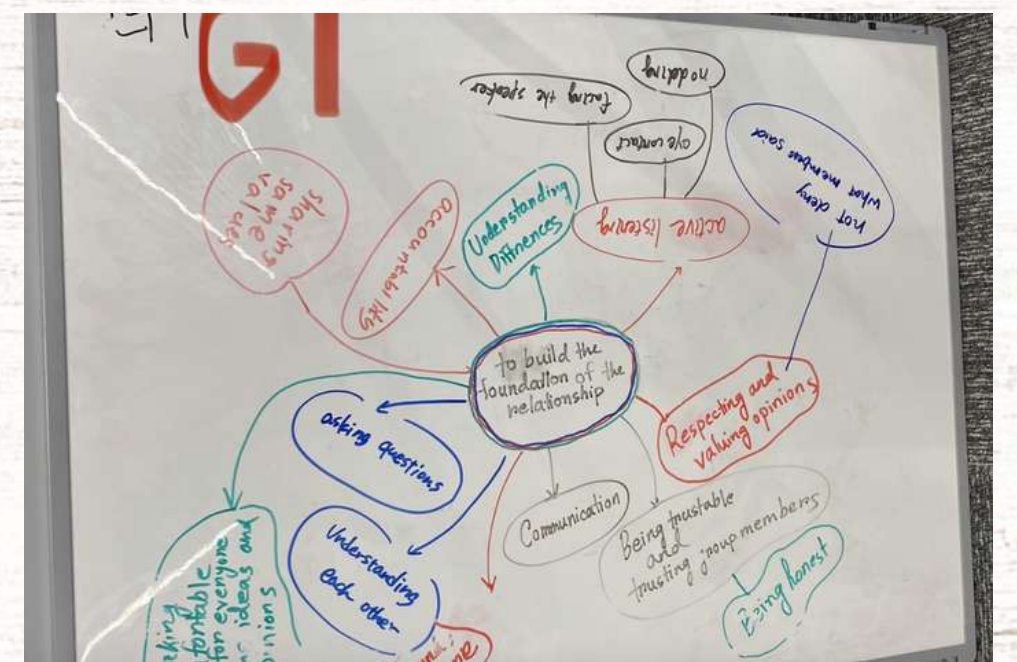


写真: ホワイトボードのマインドマップ

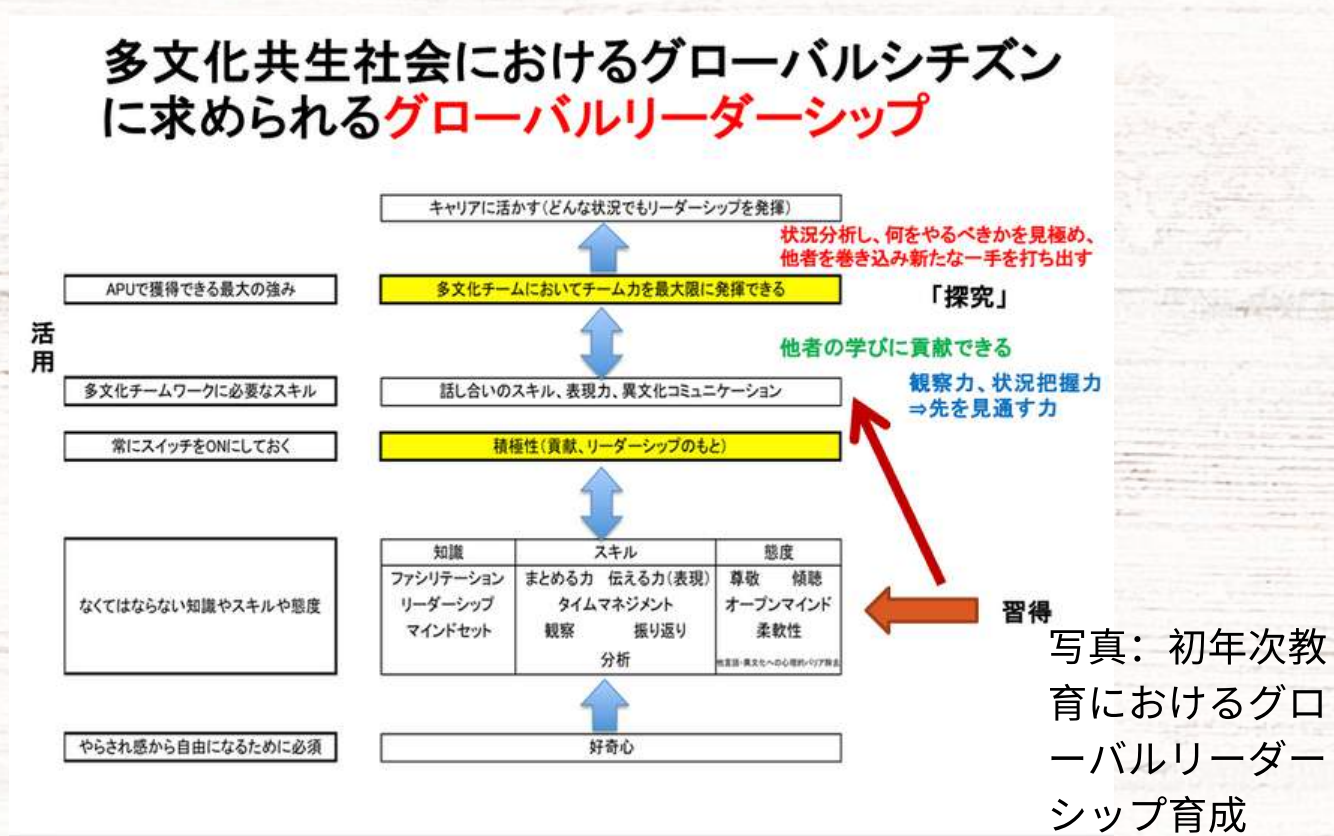
IV. 2030へ向けて

1. APU2030ビジョンの6つのアクションプランの中には、「国籍数などにとどまらず、文化・宗教・性別などの多様性をも豊かに包摂する場へ」という目標があります。この目標は、MCWやFGLなどといった日本人と国際学生が協力して共に学ぶ授業との関連性も大きいと思います。これらを踏まえて、これまでの授業内容のなかで何か変更してきた点がありますか？

2023カリキュラムから新しい科目FGL（グローバルリーダーシップの基礎）は、旧「ピアリーダートレーニング入門」から、よりグローバルリーダーシップ育成に重きを置いたコースになっています。様々なリーダーシップの理論を読み課題として学習しながら、その内容を授業でディスカッションや体験を通して学んでいくコースに進化しました。一番重きを置いているのは、関係性リーダーシップの重要性です。(1) 目的の共有、2) 包摂/インクルージョン、3) エンパワーメント、4) 倫理、5) プロセスを振り返る、ことを常に意識できるようになることを目指しています。

また、リーダーシップ理論の中でも、アダプティブリーダーシップで重要とされている「テクニカルな問題」だけの解決にとどまるのではなく「適応課題」を見逃さないことにも意識的になってもらいます。同科目の日英クラスの受講生がミックsgループを編成して、関係性構築のためのセッションを考案・実施し、他者に学びの場を提供します。

多文化編成のグループメンバーがセッション実施に向けて協力せざるを得ない環境を用意して、その大変さ体験的に乗り越えてもらう仕組みになっています。次のレベルのグローバルリーダーシップIIA&IIBに学びを進めるための基礎となっています。APU2030ビジョンのチェンジメーカー育成になくてはならない基礎的な知識と態度とスキルを身につけてもらいたいと思います。



2. SSW、MCW、FGLなどを学んだAPU学生へ期待することは何ですか？

どんな場面でも自分ができることを一歩踏み出して、困難にぶつかった時は、「だったらどうする?!」という精神で、周りの人と協働して世界に貢献してほしいと思います。

3. 今後、一緒に働く先生方に何を期待しますか？

初年時科目の授業は、受講生がいてTAがいて教員がいて、そしてオフィスの皆さんに支えられています。同じコンテンツでもグループメンバーが異なれば経験も異なり、学生の学びも多様です。それぞれの先生の経験を持ち寄り協働して、初年次教育を豊に実りあるAPUならではの教育機会として発展させていけると良いと思います。学生TAや職員の皆さんも、共に教育を実践する協働者として認識し、受講生、TA、教員、職員による学びのコミュニティをより意識的に構築していきたいと思っています。

4. 今後提供したい新たなプログラムはありますか？

FGLの次のステップとして、グローバルリーダーシップIIBを2024秋に、ソーシャルインパクトのためのリーダーシップが学べる科目を新たに開講する予定です。現在多くの学生が、前学長の出口塾やスチューデントのBプランでプロジェクトを実際に運営したり、また、個人やグループでカフェを運営したり、フードロスの活動などに取り組むなど、社会との関わりの中で取り組んでいることは素晴らしいと思っています。しかし、起業を体験した後、プロジェクトを実施した後の振り返りを行う場がないということは大変もったいないことです。そこで、新しいコースでは、起業やプロジェクトを実際に実施した学生に積極的に受講してもらいたいです。デイビッド・ストローのシステム思考の理論を基に、経験を振り返って分析してもらおうと思っています。そして、自分たちの活動のソーシャルインパクトを測るという視点を持って今後の活動に活かしてほしいです。



インタビューアー＆ライター

名前：神門美羽

学部：APM

出身：日本

メッセージ：今回のインタビューを通して、あらためて初年次教育の重要性やそこで学んだことが今後の大学生活の基盤になっていくことを実感しました。

また1つ1つの授業には教員やTAなど、実際に自分が思っていたよりも多くの人々の協力によって作られていたことを学びました。



とは

[Q]uality
[Q]uestions
[Q]ueue

APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてもらいたい、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。

